

廣部は前年度まで文化史学科に所属していたので、この聖書のバックグラウンドを研究する『植物誌演習』、『研究法演習』も今年度まで担当している。2004年度からはこの演習科目は無くなるが、『聖書と自然』は引き続き担当する予定である。どの科目を担当するにしても、廣部の場合は研究と授業の間のギャップはあまり存在しないし、最近の研究動向などを話すと学生が大変興味を示すことは事実である。これからもそのように行っていきたいと思っている。

3. 管理運営活動

廣部自身はあまり管理能力がないし、あまり好きではない。しかし決められた委員会の仕事は普通に行っているつもりである。強いて言えば宗教活動委員長として、清泉女子大の宗教的行事を行って来た。本年度からはカトリックセンター長として活動する予定である。

清泉女子大学は、カトリック精神でつくられた大学であるので、こういう活動は廣部自身としてもできるだけして行きたいと思っている。

4. 社会的活動

薬草の研究を生かすために所属している日本バイオデジタル・O・リング医学会の方と共同で難病の方の治療の手伝いを行っている。日本には沢山の方が治らない病気のために苦しんでいる。このような方を精神的に支え、かつ廣部があらゆる分野で習得した技術を提供することによって難病治療チームの仕事をボランティアで支えている。

すでにアメリカ、イギリス、オーストラリアなどでは医師、歯科医師、薬剤師、物理療法師、看護師などがチームをつくることによってより良い医療を心がけている。私はそのようなチームの中で代替医療の手伝いが出来れば幸せであると思っている。

米田 彰男

(キリスト教文化研究所助教授)

1980年代の10年間、カナダとスイスで過ごしたが、

留学生生活を始めて、うんざりしたことの一つに「自己評価」がある。やたらと自己評価を強いられた経験がある。何故うんざりしたのか？こうした発想は日本人的ではないからなのか、それとも我が怠慢からくるものなのか。今回も書きたくないのだが、あえて自己評価なるものを批判しつつ、自己批判を試みよう。実は、

(1) こうした逆説的反抗の姿勢こそ、私の研究対象であるイエスの生の本質をなすものである。そもそも教育に携わる者に対する評価というものは、生徒や学生がおのずからに与えるものであって、自分で自分を評価して、それを文部科学省に提出してどうなるというものではない。「ニワトリには三本足がある」と、いにしへの賢者が語っているが、我々はニワトリの三本目の足、即ち観念でものを考える幻想の世界からもうそろそろ脱出せねばならぬ。また、文部科学省が自己評価を要求する、その権威の構造に問題はないか？フリップール大学の我が師ボヘンスキーの名著に《Was ist Autorität?》があるが、上に立つ者は権威の使用に十分注意せねばならぬ。世には権威の誤用が横行しているからだ。何故こんなことを書くかという、これこそまさに我が学問分野だからだ。(1)「人間とは何ぞや?」「権威とは何か?」「イエスとは誰か?」こうした問いかけこそ私の研究領域である。ちなみに故ボヘンスキー教授は『哲学思索の道』や『現代のヨーロッパ哲学』(岩波)等で知られる哲学者であるが、東京工大などに弟子を持つ論理数学者でもあり、かつまた23か国語をこなす語学の達人でもあった。そして70歳でパイロットの資格を取り自由に空を飛んだ柔軟な発想とユーモアの持ち主でもあった。こうした教育者との出会いを有り難く思う。(1) 一期一会の出会い、具体的な一つ一つの出来事の大切さを探究することもまた私の重要な研究目標である。マルコ福音書とはまさに既成概念や称号でイエスを理解するのではなく、一生を通しての一つ一つの出来事の集積でイエスを描こうとした試みである。自己評価もさることながら、「偏差値」というシステムも再考を必要としているのではなからうか。数値で処理する、このこと自体が夢多き若者の心をどんなに傷つけてきたか、この単純な事実到我々教育者は自己批判の目を向けねばならない。システムそのものに矛盾があるとき、一度確定し、いわば常識となっているシステムを変革することの難しさ、私の学問対象であるイエスは、当時ユダヤの社会をがんにがらめに縛っていた規律に反抗し、掟破りの人生を遂げた。それ故、人々から「大飯食らいの大酒飲み、徴税人や罪人の仲間」と言ってはやしたてられた。人間として当然正しいことは何か、イエスにとって大事

な基準はそれだけであった。山田洋次の映画「学校（I）」に次のような言葉が出てくる。「学びたいという生徒がいて、よし教えようという先生がいる、それが学校というものだ。」日本において、今やこの学校の基本構造が崩れていることは、誰の目にも一目瞭然である。(2) 幸い清泉女子大学で講義を始めて以来、授業をやりにくいと感じた経験が一度もない。聖書学に関するものも、ギリシャ語やラテン語も、人間論やキリスト教思想に関するものも、みな耳を傾けてくれる。8年間、私が属するカトリックの一つの修道会であるドミニコ会の管区長を務めたため、ろくに授業準備が出来なかったことを申しわけなく思っているが、不思議に学生一人一人耳を傾けてくれた。ドミニコ会とは、800年程前、フランシスコ会と同時代に創設され、O.P.即ち *Ordo Praedicatorum* という名称で、説教を目的として生まれた修道会であるが、我々の先輩には、今なお中世哲学の中心軸となっているトマス・アクィナスやエックハルト、火あぶりになったサボナローラや画家のフラ・アンジェリコ、そしてラスカサス等、時代を生き抜いた人物がいる。8年にわたるその修道会の管区長職のため、落ち着いて机の前に座ることが出来なかった。その間、ほとんどまとまったものは書いていない。しかし、忙しかったから書けなかったというよりも、70歳くらいまでは、何も書かぬつもりでいる。親鸞が生涯「己証」の人、即ち自己の宗教体験に徹しながら真実を確かめたように、宗教に携わる者は、むやみに文章を書き残すべきではない。親鸞自身、「教行信証」は別として、「浄土分類聚鈔」は84歳、「唯信鈔文意」は85歳、「三帖和讃」もまた晩年の作であった。確かに、限りなき大物は文章を残さない。ソクラテス然り、孔子然り、イエスもまた然り。しかし、不思議なことに、こうした大人物の記憶（ヘブライ語で *Zikkaron* というが、これが私の博士論文の題である）は語り継がれ、書きとめられながら絶えることなく伝承されてゆく。私も何一つ書き残したくない。だからこそ自己評価も書きたくない。しかし、自己評価を書きたくない最大の理由は、私も大人物に連なる可能性を残しておきたいためではなく、人一倍なまけ者であったあの「寅さん」((1)「寅さん」は私にとって人間論の大事なテーマであるが)、あのなつかしい寅さんの系列に連なりたいが故である。

とはいえ、(3) (4) キリスト教文化研究所の所長に任命されて以来、年報の発行や20年間続いている品川区民対象の土曜自由大学の責任者のため、(1) 2001年「コムニオの神学」、2002年「神のイメージを変えたイエスの風貌」及び「古典の現代性—マルコの手法と

イチローの打法」、2003年「主の祈りとゲッセマネにおける祈り」等を書き続け、おまけに知泉書館より『神と人の記憶—ミサの根源—』を9月30日に出版した。また、2001年には土曜自由大学で「聖書からみた神への呼びかけ—Abba という幼児語—」と題する講演を行なった。これでは寅さんの系列からはずれてしまう。出版した今やまた聖なる無用性に生きた、寅さんの怠慢に帰ってゆくつもりである。

(注) 上記に付した番号

- (1) 研究活動
- (2) 教育活動
- (3) 管理運営活動
- (4) 社会的活動

門野 泉

(言語教育研究所教授)

1. 研究活動

私の研究は、二つの柱からなっている。一つは、英国演劇、特に、シェイクスピア劇の研究であり、もう一つは、比較演劇学の視点から、歌舞伎を中心とした日本の伝統演劇とシェイクスピア劇を比較研究することである。この二つの研究は、一見、異なった方向を向いているように見えるかもしれない。しかし、どちらも、上演を視点に入れて劇を読み解くという共通項で結ばれており、二つを平行して行うことで、東西の演劇の本質を考え、それぞれをより深く理解できるように思われる。

(1) シェイクスピア劇の研究：

シェイクスピアは、今日、英文学を代表する作家のように考えられている。しかし、シェイクスピアの評価は、時代によって大きく変化してきた。シェイクスピアの評価や上演を通して、受容の歴史を振り返ると、シェイクスピア劇の特質のみならず、時代精神が浮かび上がってくる。

座付き作家であったシェイクスピアは、劇場で上演するために戯曲を書いたにもかかわらず、英国ロマン派の人々は、シェイクスピアを過剰に崇拝するあま